

# 日々の祈り

2021年12月27日(月)~2022年1月1日(土)

宮崎中部教会



## <はじめに>

それぞれの日々の生活の中で、神さまに心を向け、御言葉を聞き、祈りをもって過ごしましょう。教会のために、兄弟姉妹のために、隣人のために、祈りを合わせましょう。

## <使い方>

毎日の御言葉を、可能であれば声に出して、二回以上読んでみましょう。御言葉をじっくりと味わい、聖霊に導かれるままに、祈りの時をもちましょう。

## <今週の祈りの課題>

- ・この一年も、わたしたちの命を養い、すべてを守り導いて下さった神さまに、心からの感謝をささげましょう。
- ・新しい年も、共に歩いて下さるイエスさまに寄り頼みつつ、神さまの思いに従って歩む者とされるように。
- ・世の人々に、イエスさまの祝福と平和があるように。

## 27日(月)

ルカによる福音書 20章 1~2節

ある日、イエスが神殿の境内で民衆に教え、福音を告げ知らせておられると、祭司長や律法学者たちが、長老たちと一緒に近づいて来て、言った。「我々に言いなさい。何の権威でこのようなことをしているのか。その権威を与えたのはだれか。」

昨日の御言葉を思い巡らしましょう。自分たちこそ権威者であると思っている祭司長や律法学者、長老たちが、自分たちの許可なく教えているイエスさまに、何からの権威でそうしているのかを問いただそうとしました。しかし、既にこれまでイエスさまは、御自分が神の御子であり、救い主であり、神の権威をお持ちであることを、教えや御業を通して示して来られたのです。イエスさまを神からの権威を持つ方であると信じるか。実は、彼らの方が、そしてわたしたちが、問われています。

## 28日(火)

ルカによる福音書 7章 48節~8章 1節

そして、イエスは女に、「あなたの罪は赦された」と言われた。同席の人たちは、「罪まで赦すこの人は、いったい何者だろう」と考え始めた。イエスは女に、「あなたの信仰があなたを救った。安心して行きなさい」と言われた。すぐその後、イエスは神の国を宣べ伝え、その福音を告げ知らせながら、町や村を巡って旅を続けられた。十二人も一緒だった。

「この人は、いったい何者だろう。」イエスさまは、罪を赦す権威をお持ちです。罪人と出会い、赦しを与え、「救いの恵みの中で、安心して行きなさい」と語りかけて下さいます。神の国、つまり、神の愛と恵みの支配を宣べ伝え、救いの恵みを告げ知らせ、人々をご自分の御許に招かれます。そして、十字架と復活によって救いの御業を成し遂げられる。この方は、「神からのメシア（救い主）です。」（ルカ 9：20）

29日(水)

イザヤ書 9章 5節

ひとりのみどりごがわたしたちのために生まれた。ひとりの男の子がわたしたちに与えられた。権威が彼の肩にある。その名は、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と唱えられる。

救い主としてお生まれになったイエスさまの肩にこそ、「驚くべき指導者、力ある神／永遠の父、平和の君」と呼ばれるべき「権威」があります。しかし、その「権威」は、人間が期待する形や方法で表れるのではありません。それは、神さまの仕方で、神さまの御心に従った形で示されます。なぜなら、このみどりごは、家畜小屋の貧しい飼い葉桶にお生まれになったのですから。

30日(木)

ペトロの手紙一 2章 4～5節

この主のもとに来なさい。主は、人々からは見捨てられたのですが、神にとっては選ばれた、尊い、生きた石なのです。あなたが自身も生きた石として用いられ、霊的な家に造り上げられるようにしなさい。そして聖なる祭司となって神に喜ばれる霊的ないけにえを、イエス・キリストを通して献げなさい。

イエスさまは、人々からは見捨てられましたが、神の御子であり、救い主である、選ばれた、尊い、生きた石であられました。この方に救われ、結ばれて、わたしたちもまた、霊的な家を造り上げるために必要不可欠な、生きた石とされています。主に招かれ、主のものとしてわたしたちは、人々の目には弱く、貧しく、小さい者として見捨てられようとも、神にとっては、一人一人が選ばれた、尊い、生きた石なのです。

31日(金)詩編 118編 22～23節

家を建てる者の退けた石が／隅の親石となった。  
これは主の御業／わたしたちの目には驚くべきこと。

次の主日礼拝の御言葉です。役に立たないと思われ、捨てられた石が、隅の親石、つまり家を建て上げるのに必要不可欠な要石となった。人の目による価値の判断はまったく頼りになりません。イエスさまもまた、人々から邪魔だと退けられ、期待通りではないと捨てられたのです。しかし、この方こそが、すべての人を罪から救う神の御子、メシアであり、救いの御業を成し遂げて下さるお方だったのです。「これは主の御業／わたしたちの目には驚くべきこと。」

1日(土)

ルカによる福音書 20章 13～14節

そこで、ぶどう園の主人は言った。『どうしようか。わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。』農夫たちは息子を見て、互いに論じ合った。『これは跡取りだ。殺してしまおう。そうすれば、相続財産は我々のものになる。』

明日の主日礼拝の御言葉です。天の父なる神さまは、わたしたちの許に、ご自分の愛する独り子イエスさまをお遣わし下さいました。それは愛するわたしたちを救うためです。だからわたしたちもまた、喜んでイエスさまをお迎えすることを期待しておられます。しかしわたしたちは、父なる神さまの御心が分からず、自分の都合ばかり考え、遣わされた神さまの愛するイエスさまを受け入れようとしないのです。「わたしの愛する息子を送ってみよう。この子ならたぶん敬ってくれるだろう。」わたしたちは、愛する息子を送って下さったこの父なる神さまの御心を、わたしたちへの思いを、深く知らなければなりません。